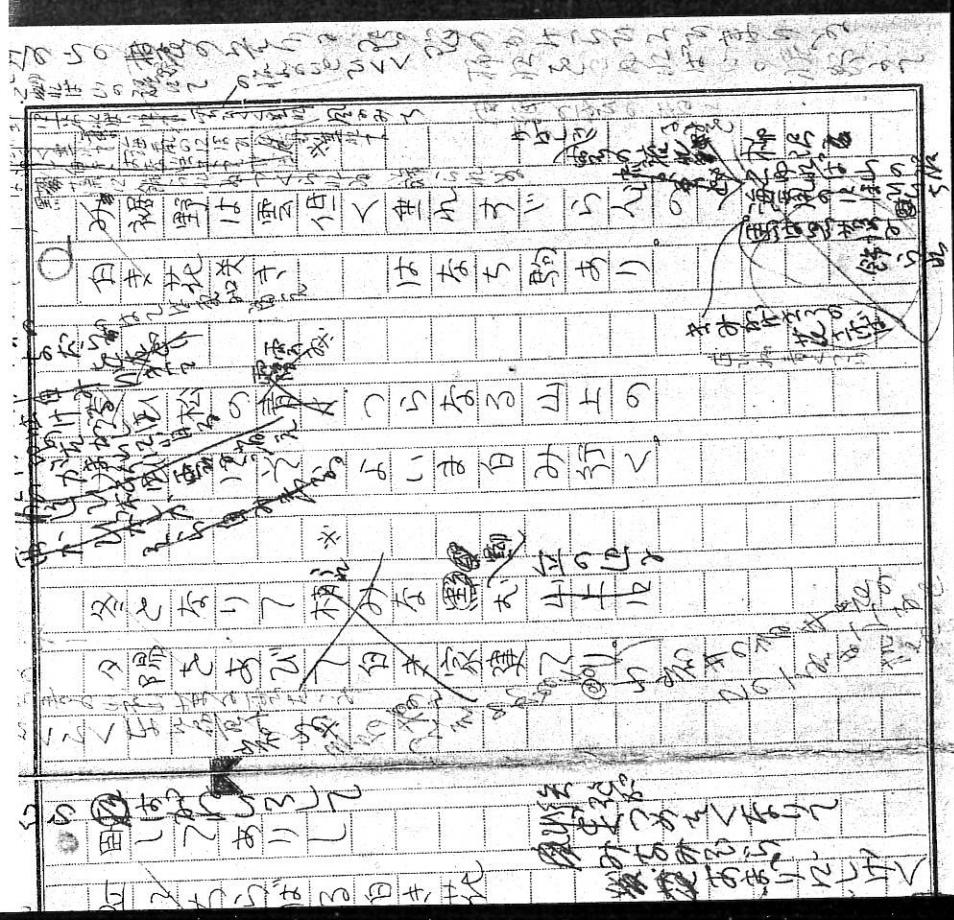


「評釈」 宮沢賢治研究会編 宮沢賢治短歌百選

宮沢賢治研究会編



「評釈」宮沢賢治短歌百選 宮沢賢治研究会編

【表紙】歌稿B第二葉 【裏表紙】歌稿A第一葉 資料提供：宮沢賢治記念館

宮沢賢治の文学活動の出発点は、短歌だった。盛岡中学生の頃から 24 歳頃まで短歌を制作し、その後も若干の短歌を作っている。賢治は、二つの歌集原稿をこした。一つは主に妹トシが筆記したもので「歌稿A」と呼ばれる。その「歌稿A」に手を入れて賢治自身が書いたものは「歌稿B」と呼び分けられている。本書では、歌稿（A・B）のほか、雑誌発表の短歌、書簡中の短歌、原稿断片等の中の短歌、童話の中の短歌から百首を選び、関連の作品とともに評釈した。

きになつてゐることがはつきりと窺われる。

歌稿B59の「アリキ缶」が、なぜ「はらだ、しげにわれをにらむ」のか、その理由を知ることはできないが、主体である賢治がます「アリキ缶」に何らかの働きかけをし、その応答として「アリキ缶」が「はらだ、しげ」に主体である賢治を「にら」み返した、そのようなやり取りを想定することは、それほどむりな解釈ではないだろう。「アリキ缶」のような無機質の存在に対し、人格を有するがごとくに働きかけをし、そしてその無機質な存在が応答するといった「対話」が、きわめて賢治童話的世界観であることが認められる。ただ、その様な主体としての賢治の自我の在りようは、他にどのような類縁性があるのか、柴山や浜垣といった精神医学からの分析のみならず、文学世界における類縁性をさらに求める必要もあるだろう。

「アリキ缶」のアリキの色は銀白色と呼ばれるものだが、賢治テクストにおいて、アリキは特徴的な語彙である。「風がどうつとやって来ました。するといままで青かつた楊の木が、俄にさつと灰いろになり、その葉はみんなアリキでできているように變つてしまひました。」(童話「鳥をとるやなぎ」)から分かるように、アリキは銀白色の色を表現するためのみではなく、硬質な金属そのものとして扱われており、注目される。「楊がまつ青に光つたり、アリキの葉に變つたり」(童話「ガドルフの百合」)も同様の表現である。「鉄葉細工のやなぎの葉」(詩「火薬と紙幣」)、「風に霧ふくぶりきのやなぎ」(詩「青い槍の葉」)もある。

012

風さむき岩手のやまにわれらいま校歌をうたふ先生もうたふ。(歌稿B59)

森義真

「岩手のやま」は、広義には「岩手県内の山」を指すが、「明治四十四年一月より」の歌稿に含まれることから、明治四十二(一九一〇)年六月と九月に二回行つた岩手山登山を示していることが明らかであり、「岩手山」を指している。「校歌」は盛岡中学校の校歌、「先生」は賢治の岩手山初登山を引率した山県頼成教諭(会頭長)、もしくは二回目の登山を引率した青柳亮教諭が考えられるが、登山の目的と参加した生徒の数を考慮した上で、歌われている先生との親密さから、「青柳亮」を指していると解釈できる。

「岩手山」は、盛岡の北西約二十kmにそびえる奥羽山脈に位置する岩手県最高峰の山で、標高二〇三八mのコニード型の火山。巣鴨山(がんじゅさん)や南部片富士とも呼ばれる。賢治が盛んに登山を行なつていた時期には、休火山とされていたが、平成十(一九九八)年頃から火山性地震と地殻変動が起り、一時は登山禁止の措置がとられた。平成十五(二〇〇三)年頃には収まり、登山も再開し、現在は「活火山であることに留意」という噴火警戒レベル1の火山とされている。

二回の登山に同行した同級生の阿部孝によると、「彼が、短い一生の間に行なつた、岩手登山の度数は、おそらく百回を突破していたのであるまい。賢治を作つたものは岩手山である」「賢治と私」『隨筆 ばら色のばら』(高知新聞社、一九六五年)と、頻繁な回数に及ぶ岩手山登山について回

想しているが、伝記的に正確な登山回数は確認されていない。

また、「それにしても、ふしきでならなかつたのは、あの初登山の際ににおける、賢治のさうさうなる健脚ぶりであった。ふだんは、色のなまつ白い、へなへなの坊ちゃんで、体操の時間などは、クラスいぢばんの劣等者だった彼が、ひとたび山に組みつくと、まるで別人のような勇者であり、英雄だったものである」(前掲書)と、山登りにおける賢治の勇壮ぶりを思い出すとともに、「この一年二回の初連続登山が、病みつきとなり、賢治は、それ以来、少し胸がむしやくしゃしくなると、まるで家の裏山へでも登るよう、無造作に、ひとりでふらりと、岩手山に出かけるようになつたのである」(前掲書)と、賢治の登山好き、岩手山好みの背景を解き明かしている。

一般的に使われている「盛岡中学校」は、明治十三(一八八〇)年五月の創立時には「公立岩手中学校」であり、賢治が入学と卒業をした頃には「岩手県立盛岡中学校」であった。現在は「岩手県立盛岡第一高等学校」となつており、これまでに、七回の校名変遷があつた。

「校歌」は、賢治の盛岡中学入学の前年、明治四十一(一九〇八)年五月十二日の創立記念日に制定され、全生徒に披露された。五年生の伊藤九万一が作詞し、一級下の佐香貞次郎の選曲により、「軍艦行進曲(一般的には軍艦マーチ)」のメロディーとされた。この記念日に全校生徒の集会が開かれ、祝辞、所感、談話が済み、伊藤の校歌制定の説明の後、当時の江崎誠校長が独唱で披露した。その後、感激した生徒たちは校庭で円陣を組み、それまでになかつた校歌を合唱して大いに喜んだ。その校歌を歌つた集会は夜中にまで及んだといつ。(『白堊校九十年史』盛岡一高創立90周年記念事業推進委員会・岩手県立盛岡第一高等学校、一九七〇年)

一、世に謳はれし浩然の大氣をここに鎮めたる秀麗高き巖手山
青流長き北上や
山河自然の化を享けて
汚れは知らぬ白堊城

二、明治十三春なかば
礎堅く壘まれて
星霜ここに幾かへり
徽章の松の色はえて
顕著の譽れは日月に
世に響くこそ嬉しけれ

三、忠實自強の旗高く
文武の海に彌る日の
久遠の影を身に浴びて
理想の船路一筋に
雄々しく進む一千の
健兒の姿君見すや

四、(略)

昭和四十二(一九六八)年夏の甲子園で、盛岡一高(盛岡中学の後継)は、一回勝ち進んでベスト8に進出した。この二回の勝利の後に、「軍艦マーチ」の校歌が歌われたことで、甲子園の観客やテレビ観戦の人たちは驚いた。しかし、そのテンポは、よくパチンコ店で流れるアップ・テンポのもので、盛岡一高関係者が歌うその三倍ほどのゆっくりとしたテンポの校歌とは、似て異なるものだった。

金田一京助(言語学者、明治三十四年卒)、小野清一郎(刑法学者、明治四十一年卒)、山口青邨(俳人、冶金学者、明治四十三年卒)、阿部千一(元岩手県知事、明治四十五年卒)の四人が、『白堊校九十年史』に向けた座談会「明治期の思い出」の中で、校歌についての話題が出て、盛り上がった様子が記録されている。金田一と小野の学生時代には校歌がなかつたが、山口と阿部は制定当時の校内の熱気

を伝えた上で、編集委員のOBが実際に四番まで歌つたところ、金田一と小野はその詞の格調高さを讃えた。

74

現在の盛岡一高まで続く盛岡中学校は、盛岡市内丸に校舎が建てられた際、外壁に白いペンキが塗られていたことから、「白堊城」や「白堊校」と呼びならわしている。ちなみに、賢治が入寮した学生寮の外壁は黒いペンキが塗られていたため、「黒堀城」と呼ばれた。

明治四十三（一九一〇）年六月の初登山の際には、山県教諭引率のもとに、植物採集岩手登山隊として約八十名が参加したが、九月の登山は青柳教諭を含め、賢治ら十一名で行われた。これは、おそらく翌年初めに入隊のために盛岡中学を去る予定の青柳教諭の送別の意味を込めた有志の登山であつたと考えられる。それは、一年生の賢治や阿部らに加えて、上級生も参加していることから、青柳教諭を慕う生徒たちが登山隊を組んだものだろう。この登山では、岩手山の頂上に立つた後、「校歌」を先生も含めて皆で歌い、気炎を上げたものと思われる。

青柳亮は、明治二十二（一八八九）年六月に現在の島根県松江市に生まれた。東京外語学校卒業後、明治四十三（一九一〇）年四月から盛岡中学に嘱託として赴任し、英語を教えた。八ヶ月間在職し、翌年一月に松江連隊に入隊のため、十一月に依願退職した。除隊後、京都一中、台北中教諭を経て、京都帝國大学に入学、卒業後に満州鉄道などに勤務した。戦後、満州から引き揚げてから、昭和二十四（一九四九）年一月三十日に急性肺炎のため亡くなった。享年六十。

賢治には、文語詩未定稿「青柳教諭を送る」の草稿があり、軍隊入隊のために学校を去る先生を惜しくて詠みこんだものと考えられる。なお厳密には、青柳は教諭ではなく、現在の講師にあたる嘱託だった。

〔参考文献〕

- 小川達雄『盛岡中学生 宮沢賢治』河出書房新社、一〇〇四年
佐藤通雅『アルカリ色のくも 宮沢賢治の青春短歌を読む』NHK出版、一〇一二年
佐藤通雅『賢治短歌へ』洋々社、一〇〇七年
望月善次『啄木の短歌・賢治の短歌26』『盛岡タイムス』一〇〇八年六月三日
『賢治の山旅』『ヨリテ』No.5、スイッチ・パブリッシング、一〇一二年十一月
『岩手山と賢治』『滝沢村と宮沢賢治』滝沢・どんぐりの会、一〇〇〇年
『白堀校80年史』白堀校80周年記念事業委員会・岩手県立盛岡第一高等学校、一九六〇年
『白堀校百年史 通史』岩手県立盛岡第一高等学校創立百周年記念事業推進委員会、一九八一年
『あ、青春 盛岡第一高等学校 白堀外史として』（毎日新聞社盛岡支局、一九七八年）
島田隆輔『宮沢賢治学会定期大会講演』『宮沢賢治学会イートアセンターニュース四六号』宮沢賢治学会イートアセンターニュース四六号、一〇一三年三月
浦和男『青柳亮のこと（追補）』『宮沢賢治学会イートアセンターニュース五五号』宮沢賢治学会イートアセンターニュース五五号、一〇一二年九月
小沢俊郎『宮沢賢治の文語詩——青柳教諭を送る』をめぐって』『啄木と賢治 第五六号』みちのく芸術社、一九七六年一月
小沢俊郎『宮沢賢治の文語詩——青柳教諭を送る』をめぐって（一一）8『啄木と賢治 第七号』（みちのく芸術社、一九七六年五月）原子朗『定本 宮澤賢治語彙辞典』筑摩書房、一〇一三年
『新校本金集』第十五卷「書簡」筑摩書房、一九九五年
『新校本金集』第十六卷下「補遺・資料 年譜篇」筑摩書房、一〇〇一年

歌稿 明治四十四年一月より

75

十秒の碧きひかりの去りたれば
かなしく
われはまた恋に向く。 (歌稿B川)

森 義真

「十秒の碧きひかり」は看護婦（現在では看護師）を示している。賢治は、大正三（一九一四）年三月に盛岡中学を卒業後まもなく、四月中旬に肥厚性鼻炎の手術のため、盛岡市にある岩手病院に入院した。五月下旬の退院まで、およそ一ヶ月余りの入院だったが、手術後に高熱が出て疑似チフスの疑いがもたらされた。

目をつぶりチフスの菌と戦へるわがけなげなる細胞をおもふ (歌稿A18)

父政次郎は付き添いで賢治のベッドの横に布団を敷いて寝ていたが、自らも発熱し、その後約一ヶ月病床についた。賢治の入院時における父の付き添いは、賢治六歳（明治三十五／一九〇二年）の時に赤痢で約一週間隔離病棟に入った時に続く二回目。この時にも、政次郎は看病中に感染して、同じ病室に枕を並べて寝たことが伝えられ、賢治は、自分の看病のために父親が一度も倒れたことに、後々まで負い目を感じていたと伝えられている。

「十秒」とは、脈をとる十秒間の時間を表わすという解釈もできるが、ここでは、先に渡していた検温器から水銀柱の数字を読み取って、手控えにメモをする間の時間を表わしていると思われる。「碧きひかり」は、その検温器を手にしている看護婦のことを表現したものと考えられる。

賢治の友人だった森荘巳池は、この短歌と後記する賢治の初恋を合せて、「十秒の恋」（『宮沢賢治の肖像』津軽書房、一九七四年）と名付けている。その初恋は、賢治の看護婦に対する片想いの恋だった。標題の歌の後に、賢治は退院後に恋愛感情を詠つた短歌を多く作つており、その看護婦のことを想い詠みこんだと思われる。

柔つみて／きみをおもへば／エナメルの／雲はてしなく／北にながる、	(歌稿B129 ^a ₁₃₀)
きみ恋ひて／くもくらき日を／あひつぎて／道化祭の山車は行きたり	(歌稿B174 ^a ₁₇₅)
君がかた／見んとて立ちぬこの高地／雲のたちまひ 雨とならしを。	(歌稿B175)
山上の木にかこまれし神楽殿／鳥どよみなけば／われかなしむも。	(歌稿B179)
志和の城の麦熟すらし／その黄いろ／きみ居るそらの／こなたに明し	(歌稿B179 _a ₁₈₀)
神楽殿／のぼれば鳥のなきどよみ／いよよに君を／恋ひわたるかも	(歌稿B179 _b ₁₈₀)

この中に、「君がかた／見んとて立ちぬこの高地」とあるが、これは「君」のいる方角、すなわち、「高地」（神楽殿のある胡四王山）に登り、「志和の城」（日説にある城山）を見ようとしていたことを歌にしていると考えられる。

賢治は、この看護婦と結婚したいと両親に話したところ、政次郎は「まだお互いに若すぎる…」としたしなめたことが伝えられている。

当時、日詔出身の看護婦には、金子さめと高橋ミネがいた。さめは賢治より十歳年上で、ミネは二十一歳年上。賢治の文語詩稿「公子」の下書きに、「父母のゆるさぬもゆゑ／きみとわれと一年も同じくともに尚はたちにみだす」という一節があることから、初恋の相手の看護婦は賢治と同じ年とされるが、賢治自身がその年齢差を把握していたのかどうか、よくわかつていない。

相手が二十一歳年上のミネと断定することはできないかもしれないが、川原仁左衛門が『宮沢賢治との周辺』(編著者刊、一九七一年)で「高橋ミネ」説を発表して以来、それをもとに賢治の「初恋(Erste Liebe)」については、多くの賢治研究家からミネ説が支持されている。

賢治が入院した岩手病院は、明治三十(一八九七)年、眼科医で岩手県県会議員の三田俊次郎により、盛岡市内丸に私立岩手病院と医学講習所が開設された。この医学講習所がその後、岩手医学専門学校(岩手医専)となり、現在の岩手医科大学へと続いている。平成三十一(二〇一九)年に岩手医大は盛岡市から矢巾町に移転したが、賢治が入院した建物は、その前に建つ「岩手病院」の賢治詩碑(昭和五十八(一九八三)年建立)とともに、今も残されている。しかし、近い将来において、この岩手医大的場所は、大学や岩手県、盛岡市などとともに、盛岡市の中心市街地の大規模な再開発が見込まれており、どのような跡地利用がなされるか、定まっていない。

また、岩手医専となつた翌年の昭和四(一九二九)年、開学一周年を記念して、岩手医専の校歌が制定された。現在の岩手医大にも継承されている。この校歌の作詞は、当時の日本を代表する詩人であつた土井晩翠であり、作曲は山田耕筰による。この校歌碑は、賢治詩碑の近くに建てられているが、この碑と賢治碑とも、再開発の末にどこに落ち着くのかについては予断を許さない。

なお、賢治の初恋の相手が、日詔出身の看護婦であったことを明らかに示していると考えられる短歌がある。この歌は、賢治が盛岡高等農林学校三年生の時(大正六(一九一七)年)に詠まれた。賢治の恋心が、退院後においてもなお続いていたことが示される。

さくらばな／日詔の駅のさくらばな／風に高鳴り／こゝろみだれぬ。(歌稿B43)

この歌は、賢治にとって印象深かつたと思われ、この歌に続く歌群にも「さくらばな」が読み込まれており、賢治の深い恋が象徴されている。この歌碑は現在、JR日詔駅前に建てられている。

〔参考文献〕

小川達雄『盛岡中学生 宮沢賢治』河出書房新社、二〇〇四年

小川達雄『隣に居た天才 盛岡中学生 宮沢賢治』河出書房新社、二〇〇五年

望月善次『啄木の短歌・賢治の短歌 31』『盛岡タイムス』二〇〇八年六月十四日

栗原敦『宮沢賢治探求 下』蒼丘書林、二〇一一年

浜垣誠司『宮澤賢治の詩の世界』インターネット <https://ihatov.cc> 二〇二二年一月閲覧

岩手医科大学『本学の歩み・年史』インターネット <https://www.iwate-med.ac.jp> 二〇二二年一月閲覧

- 『盛岡の先人たち』盛岡市先人記念館、一九八七年
 『岩手の先人100人』岩手日報社、一九八八年
 山内修『年表作家譜本 宮沢賢治』河出書房新社、一九八九年
 堀尾青史『年譜宮沢賢治伝』中央公論社、一九九一年
 堀尾青史『宮沢賢治年譜』筑摩書房、一九九一年
 『新校木全集』第十六卷下「補遺・資料 年譜篇」筑摩書房、一〇〇一年

98

018

粘膜の

赤きぼろきれ
 のどにぶらさがれり
 かなしきいさかひを

父とまたする。 (歌稿B5)

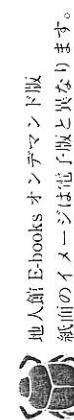
宮澤哲夫

この短歌のポイントは、上の句の「粘膜の／赤きぼろきれ／のどにぶらさがれり」という、読む者に強烈な印象を与える「赤きぼろきれ」という表現と、下の句の父とする「かなしきいさかひ」の内容だろうか。

まず驚かされるのは「粘膜の／赤きぼろきれ」の無気味な色彩「赤」である。私たちも急性扁桃炎などになつたとき、炎症のために咽喉の粘膜が痛みをともなつて赤く腫れあがり、熱が出たりするのはよく経験する。口を開けて鏡で覗いてはじめて、自分の咽喉から肥大して垂れ下がる口蓋垂を見ることができる。いがらっぽく痛み、口の中が真っ赤になつた感じがする。扁桃腺肥大などでもよくみられる症状である。力丸光雄はこれを「中医(漢方)でいう「梅核氣」つまり心因性の病を示唆する」と心因によるものとしているが、そうではなく、やはり咽喉の実際の症状ではないかと思われる。

歌稿 大正三年四月

99



地人館 E-books オンデマンド版
紙のイメージは電子版と異なります。

◎電

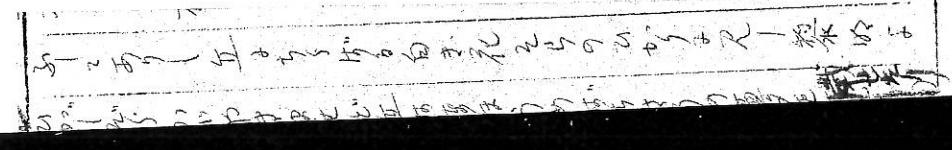
[評] 著者 各 1,1

Ama

宮沢賢治研究会 The Miyazawa Kenji Society

〔評〕 宮沢賢治短歌百選編集委員会

編集委員長 大島丈志
編集委員 村上英一・大角修・坪谷卓浩・松岡康子



〔評〕 宮沢賢治短歌百選

編集委員会

2023年8月31日

発行 地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里6-56-6 長戸ビル3階

Tel 03-6806-7937 Fax 03-6806-7937

<https://chijinkan.com>

印刷・製本 有限会社朋栄ロジスティック

©2023 The Miyazawa Kenji Society

を頂いた宮沢賢治記念館に感謝したい。

出版にあたっては、(有)地人館の大角修編集委員にお世話になつた。宮沢賢治短歌読書会については山崎善男氏にまとめていただいた。巻末の「宮沢賢治短歌についての主要参考文献」は村上英一編集委員が担当した。短歌に関する参考文献の中でも必須の文献を挙げた。今後の短歌研究の一助となることを願っている。

宮沢賢治の短歌に触れた論考は多々あるが、宮沢賢治の伝記的事実・制作当時の宮沢賢治の周辺の時代背景から読み、批評を加える研究は多くはない。また多くの短歌の中でも盛岡中学時代から最晩年まで宮沢賢治短歌を百選として流れで見ることで精緻な短歌の読みと短歌の流れがみえる短歌論になつた。

令和五(二〇二三)年八月

〔評〕 宮沢賢治短歌百選編集委員会